

上岡龍太郎さんが長期闘病 間質性肺炎と肺がんの関係

舌鋒（ぜっぼう）鋭い話芸で、テレビ司会者としても人気を集めた元タレントの上岡龍太郎さんが5月、間質性肺炎と肺がんのため亡くなっていたことが分かりました。10年ほどの間、闘病されていたといいます。間質性肺炎はどんな病気、肺がんとどう関係があるのでしょうか。

肺の主な機能は空気を吸い込んで酸素を体（血液）に取り込み、血液にたまっていた二酸化炭素を空気中に放出することです。この酸素や二酸化炭素の交換は、肺の一番奥の肺胞という薄い壁で隔てられた無数の小さな部屋で行われます。

この肺胞を構成する壁の中で炎症が起こり、肺胞の壁が線維（硬化）化して徐々に酸素交換が難しくなるのが間質性肺炎です。一方、細菌が鼻や口から入ってきて起こる通常の肺炎は、肺胞の中で炎症が起こります。

間質性肺炎の原因はさまざま、アスベスト（石綿）や粉塵（ふんじん）などによる塵肺（じんばい）、抗がん剤などの薬、リウマチなど自己免疫疾患（膠原（こうげん）病ともいう）、呼吸器のアレルギー、風邪などウイルス性感染症などがあります。まったく原因が分からないものもあり、特発性間質性肺炎と呼ばれます。

間質性肺炎の原因にもよりますが、炎症に伴い、線維化が進むと、徐々に、しかし確実に進行します。その経過はさまざま、急激に悪化し治療が効かないと数週間で亡くなることもあります。慢性的に経過することも多く、例えば、特発性間質性肺炎の予後は診断時から平均5年程度です。進行を遅らせることができれば10年以上生きることは十分可能です。

間質性肺炎と診断されたらただちに禁煙し、過労・睡眠不足を避けて、うがいやマスクなど感染予防対策など日常生活を改善します。

治療は、まず原因に応じて行います。肺の線維化が進むようであれば、線維化を抑える薬を投与します。線維化を抑える新薬は間質性肺炎の進行を抑制し、今後の改善が期待できます。必要に応じ呼吸リハビリテーションや在宅酸素療法

を行います。

とにかく早期に診断し治療を始めることが大切です。痰（たん）を伴わない空咳（からせき）が続いたり、軽い運動や階段を上がる時に息が切れたりする症状（労作時呼吸困難感）があり、レントゲン写真で間質性肺炎を疑う影があれば、呼吸器専門医を受診することを勧めます。

間質性肺炎の患者さんが亡くなる原因で一番多いのが、風邪などちょっとしたきっかけで間質性肺炎が急激に進む急性増悪です。2番目は、肺が荒廃して息ができなくなる慢性呼吸器不全です。3番目が肺がんです。

■喫煙、塵肺、アスベストとともに原因の一つ

間質性肺炎の患者さんには喫煙者が多いことも事実ですが、間質性肺炎自体が喫煙、塵肺、アスベストとともに肺がんの主原因の一つです。とくに特発性間質性肺炎では、肺がんの発生が2割程度あるといわれています。

肺がんに間質性肺炎が合併していると、肺がんの治療に難渋するとともに、その予後が悪いことが問題です。手術も、抗がん剤も、放射線治療も、行えば2割ほどの確率で間質性肺炎の急性増悪が起こり、ひとたび起こると半数は助かりません。

つまり手術、抗がん剤、放射線いずれの治療もかなり制限され、治療手段がなくなってしまうこともあります。

喫煙や塵肺を避けて、間質性肺炎にならないのが一番ですが、その疑いがあるときはできるだけ早く呼吸器専門医の診断を受けましょう。